

文化財コーナー

江戸時代の儒学者

荻生徂徠と郷土

No.360

平成29年4月

一 荻生徂徠と郷土

『徂徠先生年譜』によれば
徂徠は寛文六年（一六六六）
二月十六日に江戸二番町（現
東京都千代田区二番町）に生
まれ、幼名は伝二郎と名付け
られています。昨年は徂徠生
誕三百五十年の節目の年に当
たり、何かの縁あつてか、徂
徠の兄春竹の書簡が下太田の
篠崎家から発見されました。
また、徂徠の母の墓も本納ス
ポーツ広場奥から近くの龍教
寺に移転されました。そして、
秋には本納公民館で徂徠の資
料展が開催されました。徂
徠と郷土との関わりは、延宝
七年（一六七九）徂徠が十四
歳の時、医師である父親の方
庵が後に五代将軍となった徳
川綱吉の怒りに触れ、江戸
を追放されることになったた
め、父母らと共に、当時の本
納村にやってきたことにあり
ます。本納村で暮らすことに
なった訳は、徂徠の母方の祖
父である鳥居水右衛門忠重の

閑居があつたからです。

本納字新南地には徂徠が
十三年程生活した「荻生徂徠
勉学の地」があり、千葉県指
定史跡となっています。



▲荻生徂徠勉学の地

二 諸書に見える荻生徂徠

『鳥居氏由緒書系図』（茂原
市本納鳥居家所蔵）や荻生
家の『先祖書全』（白子町荻
生家所蔵）には、江戸で活
躍した徂徠の様々なエピソードが記載されています。そ
れによれば、徂徠は元禄九
年（一六九六）に幕府側用人
の柳沢吉保に仕え、將軍綱吉
や八代將軍吉宗等に御目見え
し、講義をしています。その
ため、季節に応じて着用する
衣服金銭等を入れる巾着袋、
薬類を入れる印籠等を貰い

受けています。また、儒学者
として活躍した徂徠につい
ては、赤穂浪士の討ち入りに対
する処分の進言や落語のネタ
になつている「徂徠豆腐」が
有名ですが、『護園雑話』に
は次のような挿話が記載さ
れています。「徂徠が赦免さ
れて上総から江戸へ帰つたと
き、芝の豆腐屋にいたが、そ
の頃殊の外貧しく、豆腐屋の
主人がよく世話をしてくれた
ので、柳沢侯に仕えて以来三
人扶持の米を一生豆腐屋に与
えた云々」とあり、「徂徠豆
腐」が全くの創作ではないこ
とが分ります。

徂徠は、享保十三年（一七
二八）一月十九日に六十三歳
で逝去していますが、その直
前に吉宗から、「ウニカウル」
という高価な生薬を賜つたこ
とが、諸書に記されており、
將軍からの信頼が厚かつたこ
とを物語っています。

郷土が誇る偉人の研究が、
さらに進められることを願っ
て止みません。

茂原市文化財審議会委員

小川 力也

文芸コーナー

俳句

しゃぼん玉虹色に飛ぶあぜ道に

時女 礼子

短歌

ひだまりに若き日を思いただ一人

霜田 友恵

かなたの友の無事を祈る日

昇り来る新しき陽を君と見る

山本 明美

水仙香る房総の宿

ふきのとう友人山で摘んでくれ

仲村美年子

天ぶら食し春を感じて

川柳

しだれ桜誘って自撮りする花見

木内富美子

寝たきりも行方不明も居る長寿

福田 研治

通学路春を呼び込むランドセル

藤橋 由裕

招かざる花粉も交じる春の使者

道譯 賢一

子の寝言覗いて見たい夢の中

吉野千枝子

ライバルは息子パソコン敵わない

川村 亮二

シンプルな孫の絵顔につく手足

今井ひさし

人は皆余白残して旅に出る

風間 敬造

さくら舞う友の笑顔にめぐり逢う

鳥海 久子

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※俳句、短歌、川柳の原稿送付先

〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。